

若松寛先生を偲ぶ

追悼 若松 寛先生

Mourning for Professor Hiroshi Wakamatsu

森 川 哲 雄

(九州大学名誉教授)

MORIKAWA Tetsuo

(Emeritus Professor, Kyushu University)

元日本モンゴル学会会長若松寛先生が2019年5月8日にお亡くなりになった。享年82歳であった。先生は1937年神奈川県にお生まれになり、1956年京都大学文学部に入学、その後文学研究科修士課程(東洋史学専攻)、博士課程を修了された。この間の指導教員はチベット史研究で有名な佐藤長先生であった。1966年に京都大学文学部東洋史助手に就任され、さらに1969年4月、京都府立大学女子短期大学講師に就任、1971年に助教授となられ、翌年京都府立大学文学部助教授に配置換え、1981年に同教授に昇進された。その後文学部長など要職を務められたあと、1999年3月、同大学を定年退職、同年4月京都学園大学(現京都先端科学大学)人間科学部教授に就任、2008年3月に定年で退職された。若松先生は1981年から日本モンゴル学会の理事となり、さらに副会長を経て2001年5月から2008年5月まで、7年の長きにわたり日本モンゴル学会会長の任にあたり、日本のモンゴル学の発展に大きな功績を残された。

先生のご研究はきわめて幅広いものであるが、その基礎となったのは幅広い教養と語学的知識で、欧米語はもちろんのこと、ロシア語、モンゴル語、満洲語、チベット語、トルコ語そのほかによく通じておられた。先生の研究は大きく二つに分けることが出来る。一つはモンゴルを中心とした歴史ともう一つは叙事詩の研究である。まずモンゴル史研究について紹介すると、デビュー論文はオイラトの初期の重要人物である17世紀前半に活動したカラクラについて論じた「カラクラの生涯」(『東洋史研究』22-4、1964)である。その後ツェワン・アラブタン、ツェワンドルジ・ナムジャル、ガルダン、ダワチ、センゲなどジュンガル史の重要人物の活動について論じられている。これとともにモンゴル、ブリヤートなどへのチベット仏教の浸透や高僧ラマの活動についても多くの論文を書かれた。「カルムックにおけるラマ教受容の歴史的側面」(『東洋史研究』25-1、1966)、「蒙古ラマ教史上の二人の弘法者－ネイチ・トインとザヤ・パンディタ」(『史林』56-1、1973)、「ガルダンシレトウ・フトクトウ攷」(『東洋史研究』33-2、1974)などはその一部である。このほかロシア語史料を利用して書かれた「ガンチムールのロシア亡命事件をめぐる清・ロシア交渉(1)、(2)」(『京都府立大学学術報告 人文』25、26、1973-1974)、「ロシア語史料より見たグシ汗の事績」(『史林』59-6、

1976)、「アルトゥン・ハーン三世伝考証」(『京都府立大学学術報告 人文』30、1978)などは画期的な論文である。もちろんこれら以外にも多くの論文があるがそれについては紙数上省略する。先生はこの外、30歳の京大の助手の在任中に『奴児哈赤』(中国人物叢書2-8、人物往来社、1967)を書かれている。これは先生の恩師の一人である宮崎市定先生が京大の定年の際に、ご自分のための所謂「記念論集」を出すことをおやめになり、その代わりとして中国の歴史的人物の伝記の叢書の刊行とその監修を乞われたときに、若い研究者を中心に執筆させることを求められたという。若松先生もその一人に選ばれたのである。

若松先生は多くの国際学会で発表され、また数多くの論文が中国訳されているが、これらの研究の価値に注目したのが、先生の長年の友人であった、中国社会科学院边疆史地研究中心の馬大正氏である。氏はもともとジュンガル史の研究をされており、はやくから若松先生の論文に関心を持っていた。1981年8月、新疆の烏魯木齊市で開催された第3回中国蒙古史学会に若松先生が招請されたときに2人は会って交流が始まった。この学会について先生は日本モンゴル学会の紀要『モンゴル研究』14、1983(pp.28-39)に報告されている。馬大正氏は若松先生の研究に高い評価を示し、中国でその論文集を編纂することを提案し、その結果「边疆史地叢書」の一冊として氏が編訳した『清代蒙古の歴史と宗教』(黒龍江教育出版社、1994)が刊行された。ここに収録されている論文を中国語訳された方の多くは現在中国モンゴル学会の重鎮となっている。この論文集は先生の論文を歴史篇と宗教篇の二部に分け、前者が8本、後者が11本の計19本からなっている。馬大正氏はその中で若松先生の研究について、その研究テーマの斬新さ、資料の豊富さ、考察の厳格さにより、現在の日本のモンゴル研究において一派をなし、名声を享受するとともに、中国のモンゴル学会においても賞賛され、また世界のモンゴル学会においても広範な影響を持っている、と述べている。また氏は若松先生の研究活動が日本と中国のモンゴル研究者の交流に非常に大きな役割を果たしたとも述べられている。

若松先生の研究のもう一つの大きなテーマはモンゴルを中心とした英雄叙事詩である。先生はすでに1960年代から『ゲセル』に関心を持っていたと述べている。1980年代に中国で『ゲセル』研究が盛んになったことに刺激され、1983年の春に関西の若手のモンゴル研究者を集めて『ゲセル』の講読会を始められた。この会は「ゲセル研究会」と称し、一月に2回ほど集まって行われたが、その後講読会では『ゲセル』をやめてロプサンチョイダンのモンゴル文『蒙古風俗鑑』に変えられた。この講読会は若松先生が京都府立大学を定年になるまで続けられ、120回ほど数えたという。この講読会に参加されたメンバーにはすでに研究者として大学の職を持っていた方もいたが、その後研究職を得たり、またいくつか注目する論文を書いた方もいた。その意味で先生が彼らの指導者としての役割を果たされたといえよう。

先生の英雄叙事詩研究の最初の大きな成果は『ゲセル・ハーン物語 モンゴル英雄叙事詩』(平凡社、東洋文庫566、1993)の刊行である。英雄叙事詩の『ゲセル』については口承されているものを書き留めたり、また写本として伝わったりしたものなど多くのテキストがあるが、それらについては若松先生が概略記されている。この翻訳は解説などを含めて430頁になるが、それでも底本としたテキストの半分を訳しただけであり、将来全体の翻訳を目指したいと記されている。ただ残念なことに本訳書には注釈が無く、とくにモンゴル語で記された登場人物の固有名詞の意味などに注釈

があれば、読み手にはその内容がより分かりやすくなったであろう。これに続いて先生は、モンゴル民族のもう一つの英雄叙事詩『ジャンガル』の日本語訳を出版された(『ジャンガル モンゴル英雄叙事詩2』平凡社、東洋文庫591、1995)。『ジャンガル』はオイラト、カルムイク人の間に伝承された叙事詩であり、これも口承で伝えられたもので、60から70歌の独立した詩篇からなるとされる、極めて長編の作品である。先生は旧ソ連から刊行された11歌からなる『ジャンガル』のカルムイク語テキストを底本にして、一部ロシア語訳を参考にして翻訳されている。原典は文語的表現であるが、訳文は散文体で読みやすくなるように工夫され、また注釈も付されている。

先生はさらにキルギスの英雄叙事詩『マナス』にも関心をもたれた。周知のようにキルギス共和国(クルグズスタン)では旧ソ連から独立した際に、英雄マナスが民族の統一的シンボルとして認定された。マナスは実在の人物ではないが1995年には同国では生誕1000年祭が行われている。先生は『ゲセル』、『ジャンガル』を翻訳されたあと、それらが「内陸アジアの英雄叙事詩も東西文化交流の研究の上で立派な資料になり得る」こと、その意味では『マナス』も同様であると考え、その翻訳に取りかかれたという。底本は旧ソ連から出版された『マナス』のキルギス文で、上記の『ジャンガル』と同様、そのロシア語訳を参照されている。先生はこの長大な叙事詩を三分冊にし、『マナス 少年篇』(平凡社、東洋文庫694、2001)、『マナス 青年篇』(同717、2003)、『マナス 壮年篇』(同740、2006)として刊行された。この長大なキルギス民族の叙事詩の日本語訳に対して、2004年10月に、クルグズ・チュルク・マナス大学から名誉博士号を、同時にキルギス共和国のアカエフ大統領から栄誉賞を授与されている。

こうした英雄叙事詩の翻訳とともにモンゴル人の間によく知られていたバラガンサンという、架空の人物の頓智話についての『バラガンサン物語 モンゴルの滑稽ばなし』(平凡社、東洋文庫771、2008)もモンゴル語原典から翻訳されている。翻訳された文は原典の半分強ぐらいの量であるが、今あらためて読むとその滑稽さが十分わかるようにみごとに訳されている。こうした英雄叙事詩は部分的な訳を通じて若干の内容は知られていたが、これほどまとまった日本語訳は無く、先生の功績は極めて大きいと言わねばならない。先生の博学さと、また熱意がこうした大きな業績を生み出したと言えよう。

最後に小生の若松先生に対する個人的な思い出についてすこし触れたい。先生とは何度かモンゴル旅行に同行させていただいた。最初は1976年8月末から9月初めにウラーンバートルで開催された第3回国際モンゴル学会と一緒に参加したことである。当時モンゴルに入るルートは基本的に二つであった。一つは旧ソ連のイルクーツク経由でウラーンバートルに飛行機で入るルートと、もう一つは羽田が大阪空港から北京まで飛行機で行き、そこから鉄道でウラーンバートルまで行くルートであった。当時は北京とウラーンバートルの間に飛行機は無かったからである。多くの参加者は後者のルートを利用し、2泊3日の列車で行ったが、中ソ対立が激しい時期であり、中・モ国境を越える際にかなり緊張したことを覚えている。当時この国際学会はモンゴル科学アカデミーの主催であり、アカデミーは学会の参加者にたいして正式な招待者と、国営旅行会社に滞在費を実費で払う訪問者という2つの異なった受け入れ体制を取っていた。私も若松先生も、また大阪大学の山田信夫先生も後者による受け入れであった。こうした受け入れ体制はその後あらためられ、参加者は平等に受け入れられるようになった。私はそのあともウラーンバートルのモンゴル学会に参加したが、

2007年の第9回のときには若松先生は日本モンゴル学会の会長として挨拶をされている。

若松先生から個人的に最初に内モンゴルへの旅行を誘われたのは1983年である。これは先にふれた、1981年に烏魯木齊で第3回中国蒙古史学会が開かれた際に呼和浩特から多くの先生が参加されていたこと、また若松先生がその学会のあとの旅行の最後に呼和浩特を訪問して、そこへの再訪を希望したことによる。こうしたわれわれの呼和浩特訪問については、内蒙古大学のエリンチン先生が文革によって海外のモンゴル学の情報が入らなくなっていたことを憂慮され、若松先生の要望に応えられたのである。若松先生と小生、それにもう2人の4人が呼和浩特を訪れたのは11月のことでかなり寒かったことを覚えている。内モンゴルの先生方も我々を大変歓迎されて、周清澗先生、ウラーンさんが北京空港まで出迎えてくれ、さらに列車で呼和浩特まで同行して頂いた。内蒙古大学、内蒙古社会科学院、内蒙古師範大学の先生と情報交換などを行ったが、若松先生はジュンガル史の問題について講演をされた。私は日本の、いわゆる明代モンゴルの研究状況について目録を作成して紹介した。これに対して内大の先生からも同様の明代モンゴルの中国における研究目録を渡されたが、文革の影響で1960年代初めから70年代末までは空白で、この間ほとんど研究がなされなかったという。一週間ほどの滞在であったが、毎昼、毎夜お酒とフルコースの料理で接待され、体を壊しかねなかったほどである。この時の訪問において上記の研究機関の多くの先生方から中国の、特に明代モンゴル史研究の現状についてお話しをうかがった。それについては日本モンゴル学会の、『モンゴル研究』(15、1984)に詳細に記している。この時は文化大革命時代に破壊された呼和浩特の仏教寺院の修復も半ばであった。また内モンゴルの学問寺として名高い五当召を訪問し、そこで一泊したことは今でも印象深い思い出である。

第2回目は1985年9月23日から10月18日までの長い旅行となった。京大の杉山さんも参加した。北京からは飛行機で呼和浩特まで行ったが、空港には大勢の先生方が出迎えてくれた。接待は前回と同様で大変であったが、今回は若松先生ほか皆で日本のモンゴル学の状況について話をした。呼和浩特での会合が終わったあと、先生の友人がハイラルにおられる、ということで呼和浩特から2泊3日かけて列車で旅行をした。これにはハイラル出身の内蒙古大学の先生に同行していただいた。ハイラル郊外のエヴェンキ族自治県の草原で牧民の家で接待を受け、白酒をたらふく飲み、羊の肉を食べたことを思い出す。この時はハイラルから鉄道でハルピン、さらに瀋陽に降り立ち、そこで知人と会ったり博物館を見学したりした。最後は北京に戻ったが、そこで先生の友人宅に接待され、これまた大宴会となった。このほか1998年8月には内蒙古大学第3回蒙古学国際学術討論会に参加した機会に、赤峰、巴林、喀喇沁地域の旅行にも同行させていただいた。

これらの呼和浩特訪問は、日本と中国のモンゴル研究者との交流を一層促進させるものとなったことは間違いない。また私にとってそれは多くのモンゴルの研究者との交流のはじまりとなり、その後の私の研究を大きく進展させるきっかけとなった。その意味で若松先生には感謝する他は無い。

先生は学者として、研究にたいしては厳しい態度をとられた。学会において単純な史料紹介など中身の無い薄っぺらな発表があると、一体何を言いたいのか分からない、などとかなり批判されていた。しかし他方ではユーモアを好む人間味ある方でもあった。パイプでタバコをお吸いになり、またお酒も多く嗜まれた。モンゴル研究において日本だけでなく、国際的に見ても大きな功績を残された先生に感謝の念を送るとともにご冥福をお祈りする。

追記

本稿を書くにあたって若松先生のお書きになったものを参照したが逐一典拠を示さなかった。また奥様の若松恭仁子様、神戸大学萩原守氏、九州大学小林亮介氏から先生に関する経歴その他についてご教示いただいた。ここに感謝申しあげる。なお若松先生の経歴、著作については京都学園大学人間文化学部『人間文化学会紀要』21 (2008) に掲載されていることを申し添えておく。